

私の番号は661。そして「」でも偽名の田中を名乗った。

軍隊では戦陣訓の「生きて虜囚の辱を受けるより死を選べ」と教えられ、敵に捕まるなど最も恥じとく、軍人にあるまじき行為として、軍隊ばかりでなく日本人の全てから侮辱されている。しかし、この收容所には巡洋艦「古鷹」の乗員だった人たちは、上官から三等兵まで全員が一度に捕虜になつたせいから、みな本名を名乗っていた。

最初この收容所は、一つのテントに十人が入れられ、難民キャンプのようであつた。負傷者、マフリア患者がほとんどで、多少動ける栄養失調でいどの者が炊事洗濯をしていた。マフリアには二日目症状が出る二日熱とか、人によつてそれぞれ違つていた。

私もマフリアにかかつていた。收容所へ来てほつとした気のゆるみからか、ここにきて初めて症状が出はじめた。私のは三日目にでる三日熱で、悪寒がはしり、体全体にケイレンがきて歯が合わなくなり、とうにも止まらなくなつた。仲間に毛布を沢山掛けてもらつても止まらない。毛布の上から仲間に乗つてもらい、押さえ付けてもらつても、それをはね飛ばすほどの激しいケイレンであつた。

暫く時間がたつと今度は逆に体が熱なつて、四十度を越す熱が出た。裸になつて、水を飲もうがおさまらず、汗びしょり、熱にうなされて頭の中がガンと、時間がたつうちに夢から目覚めたようになる。

いままでのことが嘘のようにつらつとした。これが三日ごと定期的にやつてきた。

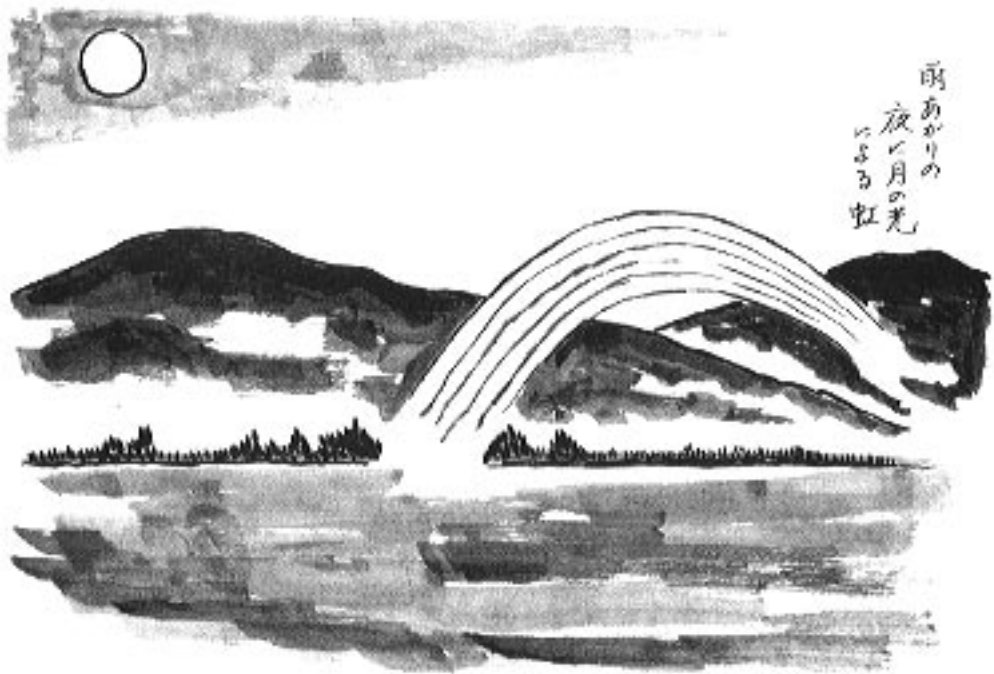
ある者はこれで頭がおかしくなり、死んだほどであつた。症状の出るとき以外、日常生活にはなんら支障がないという奇妙な病気であつた。

マフリアの薬はアスピリンしかくれなかつた。敵の軍医の言ひ分は日本軍がマフリアに効く薬、キナーネの探れるボルネオを占領しているから薬がない、のだそつだ。

シラミが大発生し、ホワイトチーチーなどとよんでシラミ退治に大奮だつた。天気の良い昼間は三十度近くになるので、全員ふんどし一つになつて衣服の縫い目にかくれるシラミを文字通りシラミ潰し、だがとても取り切れるものではなかつた。

釜に石鹸水を沸騰させて、その中へ衣服を放り込み煮沸消毒もしたが、それでもシラミは執拗で居なくならなかつた。

雨あかりの  
夜に月の光  
にふる虹



南極に近いせいか、われわれ日本人が見たこともないような神秘的な光景に出会い、  
感激することが多かった。

山のほうで雨の上がった夜、くつきりとした夢のような虹を見た。通訳のロバートソン  
は三年に一度くらい見られると言った。

月の大きいのに驚いた。日本でみるより何倍も大きいのだ。

白アザミの花が終わるとタンポポ  
の綿毛と同じように飛ぶ光景は素晴  
らしかった。

山や木々の黒をぶく々に風に身をま  
かせて、何百メートルもの帯となつて  
雲や煙のように吹き飛ぶ様はこの世  
のものとは思えない、天国の風景かと  
錯覚するほどであった。



野の種子が

次天風にあおられ  
雲や煙のようにあふれ  
舞は、この世の光景とは  
思えないほど  
すばらしかった。

